

イースターからペンテコステに向かう50日も、残すところあと1週間となりました。初夏の爽やかな季節に、聖霊の風が吹くペンテコステを待ち望みます。

### 二人の息子

今朝の聖書箇所は、イエス様のたとえ話の中でも、「良きサマリヤ人の例え」と双璧をなす、有名な「放蕩息子の例え」の後半部分です。どうしても、家を飛び出した弟の姿が記憶に残りがちですが、実は同じくらい、真面目な兄は、大切な存在です。そのことを心に留めたいと思い、あえて二回に分けて、この箇所を扱いました。

私たちが普段の生活で、不快に思うことの原因は、二種類あると思います。一つは肉体的な痛みです。どこかが痛いとか、よく眠れなかったとか、熱っぽいとかです。でももう一つは人間関係です。ずるいとか、損をしたとか、不平等だとか、そういうことを思う時、その不快な気分は自分でもコントロールできなくなります。

イエス様の例え話の二人の息子は、この人間の姿を私たちに教えています。神様の愛を教えています。自分は弟よりも、兄のようだ、と感じる人も多いでしょう。

私は牧師の息子で、特にそんな気持ちがありました。長い間教会を休んでいた人がみんなに歓迎されるのを見て、心の中で、どうせ来週はまた来ないだろう、夕拝や祈禱会にも出席し、お掃除までしていても、誰もこんなふうに歓迎なんてしてくれない、と悲しく思ったことは、一度や二度ではありませんでした。

イエス様が、兄の姿を例え話に入れてくださったことを、嬉しく思います。弟の遠い国からの帰還に比べれば、兄の立つ場所は、あるいて数歩の目と鼻の先です。けれど、慈悲深い父は「入ってこい」ではなく、やはり弟と同じように「父親が出てきて、なだめた」のです。そしてやはり同じように「子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる」と優しく声をかけてくれたのです。

### 慈悲深い父

この例え話で、一番よくしゃべっているのは、弟でも、兄でもなく、実は父親です。主役は憐れみ深い父親だとも言えます。私は「放蕩息子のたとえ」というより「慈悲深い父のたとえ」と言うほうが、良いのではないかとさえ思います。

父は、もちろん天の神様を表しています。弟にも、兄にも、「同じように」憐れみ深い神の愛が、余すところなく語られているのです。私たちの社会では、協力の精神より競争の精神の方が強いので、二人の兄弟がいればどうしても「どちらが」愛されているかを考えてしまいます。ですから、「悪人の味方」のように、神様が見えてしまうのです。けれども、その人間の思いを超えて、神は私たちを同じように愛しています。この愛は私たちに喜びを与え、天国の宴会と音楽と踊りという、素晴らしい輪の中に、私たちを招き入れます。それこそ、心の底で、皆が願っていることなのです。